

HOME STAY

(昭和49年8月)



アダム、アラン兄弟とメルボルン近郊の海岸を散歩される

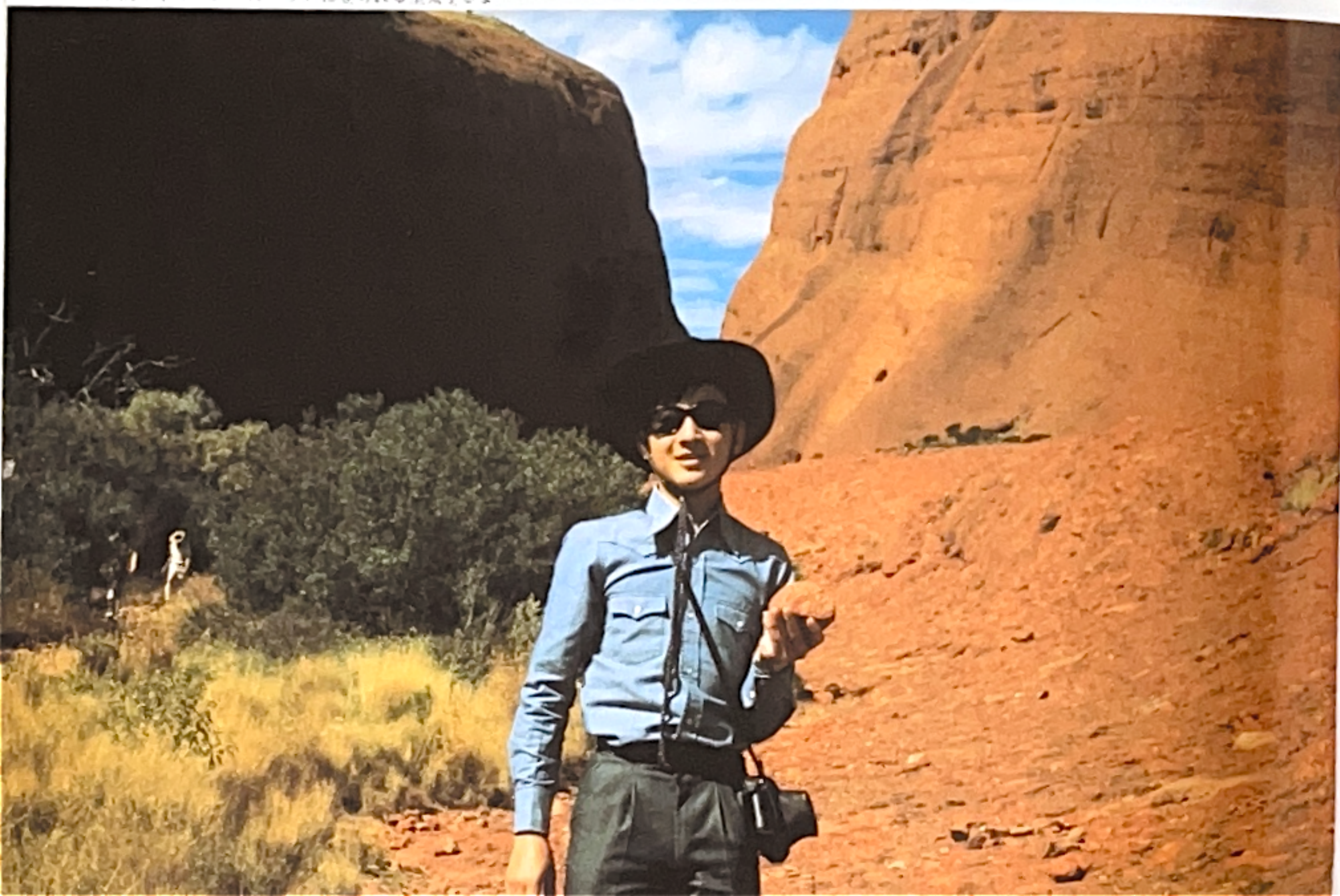


長男アダム君とバイオリンの二重奏を楽しまれる



オーストラリアのホームステイ先、ハーバー一家と

砂漠の中のエアーズロックに登られる皇太子さま



皇太子さまは中等科へ、秋篠宮さまは初等科へご入学(昭和47年4月)



14歳の誕生日を前に愛用の天体望遠鏡で
すい星を観測される(昭和49年2月)



来日したベルギー国王夫妻にピアノの演奏を披露される(昭和49年11月)

HOME STAY

(昭和49年8月)



アダム、アラン兄弟とメルボルン近郊の海岸を散歩される

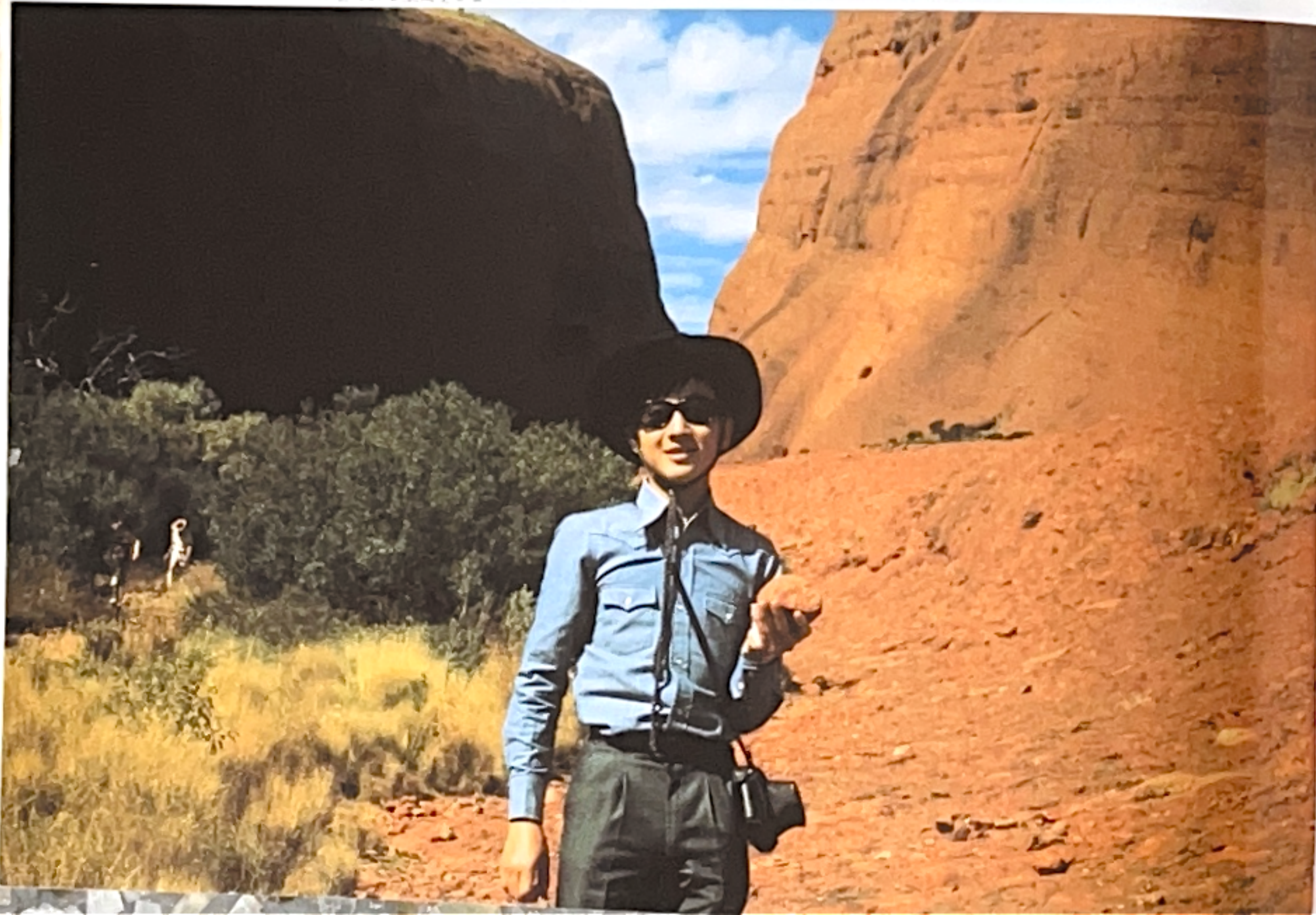


長男アダム君とバイオリンの二重奏を楽しまれる



オーストラリアのホームステイ先、ハーバー一家と

砂漠の中のエアーズロックに登られる皇太子さま



皇太子さまは中等科へ、秋篠宮さまは初等科へご入学(昭和47年4月)



14歳の誕生日を前に愛用の天体望遠鏡ですい星を観測される(昭和49年2月)



来日したベルギー国王夫妻にピアノの演奏を披露される(昭和49年11月)



18歳の誕生日を迎え、書道に励まれる。高等科2年ごろから草書の段階に進まれた(昭和53年2月)

スキー旅行の日焼けした顔で高等科卒業式に出席される皇太子さま(昭和53年3月)



赤坂御用地内の馬場で乗馬をされる皇太子さまとご一家(昭和51年11月)

赤坂御用地内の白樺林で羊と遊ばれるご一家(昭和52年4月)



美国留学を終え、26歳の誕生日を前にデニスをされる
(昭和61年2月)



赤坂御所でお得意のピオラ
を演奏される皇太子さま
(昭和61年2月)



岡山県の福祉施設「たけのこ村」に完成した穴窯火入れ式のため、自ら点火した「友情の火」を贈られる(昭和53年11月)

東京・日自の学習院大学で、児玉幸多教授(右端)から歴史の講義を受けられる皇太子さま(昭和55年2月)





子供たちと歓談される皇太子さま（平成4年11月）

たんのうな英語、ユーモアも 皇太子さまのお人柄

青年皇族の代表として、公務に当たっている皇太子さまは、公務以外にも歴史の研究や、スポーツ、音楽などで幅広い活動をされている。英国留学では自由な生活も経験された。

主な公務は国内での各種式典や国際大会への出席。外国への公式訪問も、皇太子になってから六回こなし、たんのうな英語で、国際親善にも大きな役割を果たされている。

少年時代は、皇室に新しい風を吹き込まれたご両親の下で、のびのびと過ごされた。「粘り強く、何事にも手を抜かない」というのが側近や、友人の一定した皇太子評だ。

学習院大では中世史を専攻、研究に打ち込まれた。卒業論文「中世瀬戸内海水運の一考察」は原稿用紙百枚の力作で採点はAだった。卒業後は大学院に進み、昭和五十八年から英国オックスフォード大に留学された。帰国後も学習院大大学院に籍を置き、研究を続けられた。学習院初等科卒業の時の作文で、大学で日本史を教える夢を描いた皇太

子さま。平成三年には、夢が実現し、学習院大経済学部で四回の特別講義をされた。一回目の冒頭「万一再い講義になったら、終わった後おいしい食事をして、がまんしてください」とユーモアで切りだし、好評だった。現在は、同大史料館の客員研究員をされており、歴史研究は生活の柱になっている。

二年間の英国留学は、皇太子さまに大きな変化をもたらした。初めて手帳を持ち、自分でスケジュールを入れるという体験もされた。「積極的になられた」「ユーモアもうまくなされた」と友人は話す。

スポーツはテニス、スキーから剣道まで幅広くこなされる。得意のテニスは粘り強い性格が表れ、ベースラインで根気よく打ち返すスタイルが大好きだ。子供のころは野球に熱中、陛下から贈られたグローブとバットで御所の庭で職員らと三角ベースの草野球を楽しまれた。

スキーは元五輪銀メダリストの猪谷千春氏の父六合雄氏らのコーチを受けられた。学生時代にめきめき腕を上げ、昭和五十八年には国際職業教師協会（ISIA）のシルバードリフト認定試験にも合格されている。

御用地内でジョギングを続け、最近では知人に贈られて自転車も乗り始め、将来はマラソン、水泳、自転車のトライアスロンに挑戦する計画もお持ちと

いう。

「山に登っている時は雑念がありません」という皇太子さま。下界の堅苦しさを忘れられる登山は、大変お好きで、これまでの山行は百二十回を超えた。侍従に「山ばかり登っているから、お姫運びが遅れるんです」と冷やかされ、首をすくめて「すみません」と苦笑いされたこともある。六十一年には日本山岳会員になられた。会員番号は一〇〇〇一番。

音楽は小さいころから造詣が深く、オペラやコンサートに足しげく通われる。自らピアノを演奏し、コンサートにも出演されている。平成四年には音楽仲間と結成した室内管弦楽団でビバロディの「四季」などを録音、CDを自主制作された。

お酒は強く、特に日本酒が好き。友人は「明るい酒」と評する。カラオケを歌うだけだった一面も見られる。曲はたいいてい「水戸黄門」。

ご自分の結婚について「価値観の同じ人」プロセスを大切にしたい」と話されてきた皇太子さま。弟の秋篠宮さまの婚約が先に決まった時も「（焦りは）全くございません」「マイペースで何でもやっていきたい」と語られていた。粘り強い深夜の電話で熱心に説得を続けられ、かつて「自由を犠牲にするなんて考えられない」と語ったことのある雅子さんとの婚約を現実させた。

（共同通信社部 松本哲夫）



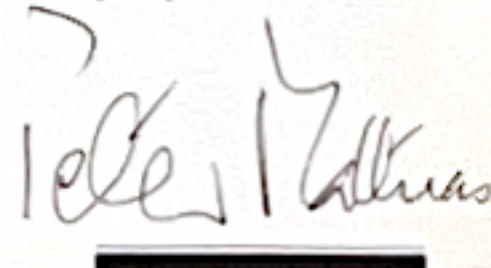
学習院大学大学院人文科学研究科修士課程を修了（昭和63年3月）

婚約にあたって皇太子さまへ

オックスフォードでのきずなを広げて…

ケンブリッジ大学
ダウニングカレッジ学長

ピーター・
マサイアス



皇太子さまと小和田雅子さんの婚約にあたり、お二人に祝辞を贈り、おめでとうと言える機会を得られたことは大きな喜びです。ご婚約は、私たちが大層心待ちにしていた素晴らしいニュースです。皇太子さまとお妃様ばかりでなく、皇室にとって、そして日本にとって素晴らしいものです。私たちの期待が大きく膨れ上がった分、余計喜びは熱烈になりました。

私は、皇太子さまが一九八三年（昭和五十八年）夏、留学のためオックスフォード大学へこられて以来、深く知り合った間柄なので、まずは個人としてお祝いを述べます。同時にこのあきつは、皇太子さまが英国滞在中に出会ったあらゆる人々に共通したものであることを私は知っています。特に私は国際経済史学会の名譽会長として、経済史家の皇太子さまに全世界の経済史家からあきつを送ります。

皇太子さまはオックスフォード大学留学時代、楽しい思い出を持っていらっしゃると思います。思い出は記憶にのみとどまっています。皇太子さま



オックスフォードで紀宮さまと



留学先の学友たちと三重奏。皇太子さまはビオラを（昭和59年2月）



産業革命ゆかりのアイアンブリッジを見学される皇太子さま。マサイアス教授（左）は留学中の恩師（昭和58年12月）



マサイアス教授（左）とともに、グロースターにある国立水路博物館を見学された皇太子さま（平成3年9月）

まはマートンカレッジの名譽研究員、オックスフォード大学の名譽学位、そしてオックスフォード地方の十八世紀水運史の継続的な研究を通してオックスフォードとの関係を保っていらつしやいます。

皇太子さまが、このオックスフォードの体験をお妃と共有なさることは、偶然とはいえ、うれしいことです。この共有体験が、お二人のきずなを広げていくことになればと、私は希望しています。留学時期は同じではなかったとしても、オックスフォードでの研究には、厳しい学究生活、知的興奮、さまざまな友情の楽しみ、カレッジと大学における社会生活など、共通して体験されたことの思い出があり、喜びがよみがえってくると思います。

お二人は日本から遠く離れた国々で生活し研究した体験を、現在および将来の公務に生かされるでしょう。日本が国際経済と国際外交の舞台でより中心に位置するようになるにつれて、円熟さと幅広い体験を持たれる皇太子さまとお妃がいらつしやるということは偉大な力となるはずです。

このメッセージは、お二人の将来の幸福と成功のためのあいさつでもあります。そして、お二人の英国とオックスフォードとの幸運な関係が次の世代にも維持されるよう望んでいます。

一九九三年一月

心のこもった国際親善と 時代の先を行く夫婦像を期待 皇太子さま、雅子さんのご婚約に寄せて



上智大学教授（国際政治学）

猪口邦子

いのちを大切に

英知に心からの敬意を表したいと思う。
心と文化の交流に
積極的な役割を

このように卓越した若いお二人であるだけに、期待申し上げたいことも多い。今日の日本は世界各国との相互依存を深めつつあり、政治や経済を超えた心と文化の交流も重要になっている。国と国との交流の回路には、政府の外交や企業間の協力、市民や学生の交流などさまざまなあるが、皇室による国際親善は日本国民の精いっぱい誠意を伝える大切な交流の回路である。若いお二人には、天皇、皇后両陛下をお助けする形で心のこもった国際親善の輪をはぐくんでいただきたい。

皇太子さまと小和田雅子さんのご婚約を心からお喜び申し上げたい。皇太子さまは自らの大きな恋愛を貫かれ、プリンスとしても一人の人間としてもご立派であつたと思う。雅子さんに思いを寄せられる一方で、英国留学の成果を、テムズ川をめぐる経済史の英文学術書にまとめたり、さまざまな公務に熱心に励まれ、最良のクラウン・プリンスの道を歩まれてきた。また、雅子さんは皇太子妃候補となつてから数年に及ぶさまざまなプレッシャーにもかかわらず、勉学と外交官の職務にいらして誠実な生き方を守り抜き、みごとであつた。時代にふさわしいお似合いのカップルなどという前に、お二人に共通する真の人間的な強さと勇氣と



皇太子さまの婚約内定後初めて、神奈川県
の葉山御用邸裏の海岸を散策される
（平成5年1月16日）

そのような役割の面でも雅子さんは最良のパートナーであろう。雅子さんには、いままでとは別世界に入るという気持ちではなく、むしろ市民社会の中で得た見識や経験を大切に生かしながら、皇太子さまと共に世界の人々の心に届く交流を心掛けてもらいたいと思う。また、国際親善の方法や訪問先については、お二人が自らの発意を大切にされるよう期待したい。

他方で若いお二人には、国内社会のさまざまな問題についても、広く理解と関心を示していただきたい。高齢者、身障者、被災者など、苦勞の多い人々への温かいお気持ちの表現は、国民に大きな励みと救いをもたらしてくれよう。たとえば最近では、普賢岳に向かわれた両陛下のお優しさは、万人の心を慰めて下さった。開かれた皇室の心を日本の市民が実感するのは、そんな瞬間ではないだろうか。

また、経済大国といわれながらも、日本にはまだ普通の生活者にとって優れた社会環境が整っているわけではない。過労ぎみの就労者や育児中の働く母親のための社会改革など、二十一世紀の文明社会を目指して取り組まなければならない課題は多く、このような同時代の諸問題についても、お二人には鋭敏であつていただきたい。市民社会との出合いの場を広く持ち、社会の鼓動を直感できる皇太子ご夫妻であつ

てほしいと思う。

共に学び、
共に高め合うご夫妻に

このような多大な役割を担いながら、新しい環境で家庭をはぐくんでいく雅子さんには、戸惑いもあるかもしれない。皇太子さまには、愛と勇氣をもって皇室に入る雅子さんを、永久に、絶対的な優しさで守つてあげるようお願いしたい。そして若いお二人には、共に学び、共に高め合うような生活を期待したい。いま日本の若い世代は、夫婦共働きだけでなく、夫婦共学びの可能性を求めはじめています。日本の若い男女に夢と希望を与えるような、夫婦共学びの皇太子ご夫妻であつていただきたい。

思えば、両陛下も、新しい時代の若い夫婦の新しい生き方をお示しになり、多くの国民に希望を与えて下さった。たとえば、皇后陛下が自ら皇太子さまを懸命にお育てになられたご様子は、民主的な社会における育児の重要性和母親の復権を示唆し、そのことに啓発された母親は、積極ながら私の母も含めて数知れない。いつの時代にも、皇太子ご夫妻には、そのように時代の先を行く夫婦像が期待されているのかもしれない。

皇太子さまと雅子さんが互いに助け合い、高め合いながら、幸福なご家庭を築かれることを願つてやまない。



皇太子殿下
おめでとーうございます

東京・新宿で開かれた「平成の皇室」写真展で、小和田雅子さんの写真にはは笑まれる皇太子さま（平成5年1月15日）



皇太子妃決定までの長い道のり

こうして最もふさわしい才媛が選ばれた

共同通信整理部長
高橋 紘

「それでは採決をいたします。賛成の方はご起立願います」

一九九三年一月十九日、宮内庁特別会議室で開かれた皇室会議。議長の高橋宮喜一首相が促すと、三笠宮夫妻以下の全皇室会議議員が、にこやかに笑みを浮かべながら一斉に起立した。この瞬間、皇太子徳仁親王妃に小和田雅子さんが決定した。長年に及んだ「重大

事」は、やっと解決した。

皇太子妃の選考作業が始まった時期は不明である。戦前なら、皇子が学齢に達したところからお相手のリスト作りがなされたが、今回はいつごろからスタートしたのか。皇太子は二十五歳の誕生日会見で「三十歳までには結婚したい」と語ったが、宮内庁がお妃選びというギアを改めて入れ直したのは、

英国留学から帰国した八五年ごろだった。

二十八歳の誕生日を迎えた八八年、皇太子は婚約までの進み具合を富士登山にたとえて「七、八合目ごろ」とし、「山頂は見えているが、なかなかたどりつけない感じ」と述べた。

実はその一年ほど前から「本命」の雅子さんと御所や高円宮邸で長時間にわたって語り合っていたのだ。「七、八合目」発言は、もちろん彼女を念頭に置いていたもので、まじめで正直な皇太子は、記者団の質問について本音を漏らしたのである。

「小和田さん急浮上」を最初に報じたのは、スポーツ紙である。事前に知った東京職幹部の落胆ぶりは大きく、何とか抑えることはできまいか、と焦った。彼らのこうした口調から推して、私たちは「小和田さん本命」と当時は感じ取った。

しかし、雅子さんのマスコミに対する態度は厳しかった。また小和田家の姿勢などから、確信は次第に薄れていった。とはいっても家の家系、美ぼう、

皇太子と何度も会っていることなどから「監視」は怠らなかつた。

八七年九月、昭和天皇は「慢性膀胱炎」で手術を受け、翌年秋には再発、八九年一月七日崩御した。宮内庁は大喪や即位の諸儀式の準備で忙殺された。しかしお妃問題を失念していたわけではない。昭和天皇が存命のうちに何とか婚約でもと、必死の努力を傾けていた。天皇の学友筋から、具体的な候補者も上がった。

時代が「平成」に入り、選考作業に拍車がかかった。皇太子は「あせらず、マイペースで」などと鷹揚に構えていたが、側近はどうすれば極秘のうちに見合いができるのか、と策を練った。

そこで思いついたのが、学生のあふれる学習院構内や音楽部の先輩宅といった場所である。最終的には実らなかつたものの、キャンパスでのお見合い相手の中から、婚約の一手前まで進んだ人もあった。

次男坊殿下文仁親王（秋篠宮）の婚約が発表され、お妃報道は過熱する一方だった。天皇は九〇年暮れの会見で

がかりである。いまの天皇も、一時は絶望的となり、「一生結婚できないかもしれない」と学友に内心を打ち明けている。

初めて民間から選ばれた皇后は、大変な苦勞をした。皇太后、皇族などがいかに民間妃に不満をもっていたかは、『入江相政日記』などから知ることができる。天皇とともに手を携えながら、皇后はそれを取り切ってきた。並々ならぬ強さである。

お姑さまのときと違って、陰湿ないじめ。や陰口は少ないはずだ。しかし、自分の意見は通したくても、宮内庁の厚い壁に阻まれる場面が何回もあるだろう。皇后は結婚した翌年、時には八方ふさがりのような気持ちになる」と述べたが、雅子さんもそう感じるときはあるはずだ。

キャリアの外交官として、あるいは育った経験から広く世界各地をご存じだという。ぜひ、その体験を生かしてほしい。国際化社会の中で皇室をどのように位置づけたいのか考えてほしい。選考が難航したのは、「国民とともにある皇室」という天皇の発言とは逆に、皇室がいかにしく、国民から遠のいているからだ。どうすれば良いのかを若いお二人で示してほしい。私たちも協力する義務があることは、もちろんである。



「内定」報道後に初めて外出する小和田雅子さん（平成5年1月8日）

「事実無根のことで困っている人もいると聞いている」と苦言を呈した。こうしたこともあって、宮内庁は「殿下に静謐な環境を与えてほしい」と報道側に懇請、九二年二月、皇太子妃報道に関する「申し合わせ」が成立した。協定は三回延長され、九三年一月末で期限切れとなっていた。その直前、雅子さんは皇太子の申し出を受けたのである。

雅子さんは、これまで浮かんたどの候補者より、皇太子妃としてふさわしい資格をもっている。才媛というのは、まさにこういう人を指すのであろう。数カ国語を話す美人外交官、皇太子が希望する「はつきり自分の意見が言え



恩師宅での新年会からお帰りの皇太子さま（平成5年1月6日）

しかし、今回のお使い、元外務事務次官柳谷謙介氏は本人も認めているように「二介の両車」である。両車を回すよう入力したのはだれか。外圧によって長い空白期間の不要なデータが、ワープロのキーを操作するようにして「削除」されたのではないか。といって雅子さんが不適格というのではなく、皇太子が嫌々ながら婚約したというのでもないことは、もちろんのことだ。「すべてがうまくいった」のである。

戦前まで皇太子妃は、皇族や限られた家系の堂上華族から選ばれた。候補者リストは自動的にできた。皇室からの申し込み（プロポーズ）は、断ることではできなかった。

それでも政治が介入し、妃の選考は難航した。昭和天皇の婚約では、宮中某重大事件と騒がれ、大正天皇の皇后は伏見宮家から五摂家のひとつ、九條家に差し替えられた。いずれも十年

小和田家の人びと

堅実で学問好きの秀才ぞろい



母方の曾祖父江頭安太郎氏（海軍時代）



母方の曾祖父山屋他人氏（海軍時代）

小和田雅子さん(29)の家系は、大学教授やエリート官僚、弁護士、作家など秀才ぞろい。堅実で学問好きの家風は、中世交通史が専門の皇太子さま、魚類分類学を研究される天皇陛下と秋篠宮さまに象徴されるように、学問を愛する天皇家と相通じるものがある。

父の小和田恒氏(60)は外務事務次官。東大教養学部を卒業後、昭和三十年外務省に入り駐米公使、駐ソ連公使、条約局長、官房長、OECD大使、外務審議官を経て平成三年八月、外務官僚のトップの事務次官に就任した。

仕事ぶりは「スパコン」

入省後、英ケンブリッジ大で国際法を専攻、博士号を取った。帰国後もエリートコースといわれる条約局畑を中心に歩き、福田起夫元首相に有能さを買われて外相秘書官、首相秘書官と二度にわたって仕えた。また、母校の東大で二度の非常勤講師経験があり、五十四年から米ハーバード大で二年間客員教授を務めた学究派で、国際法の權威でもある。

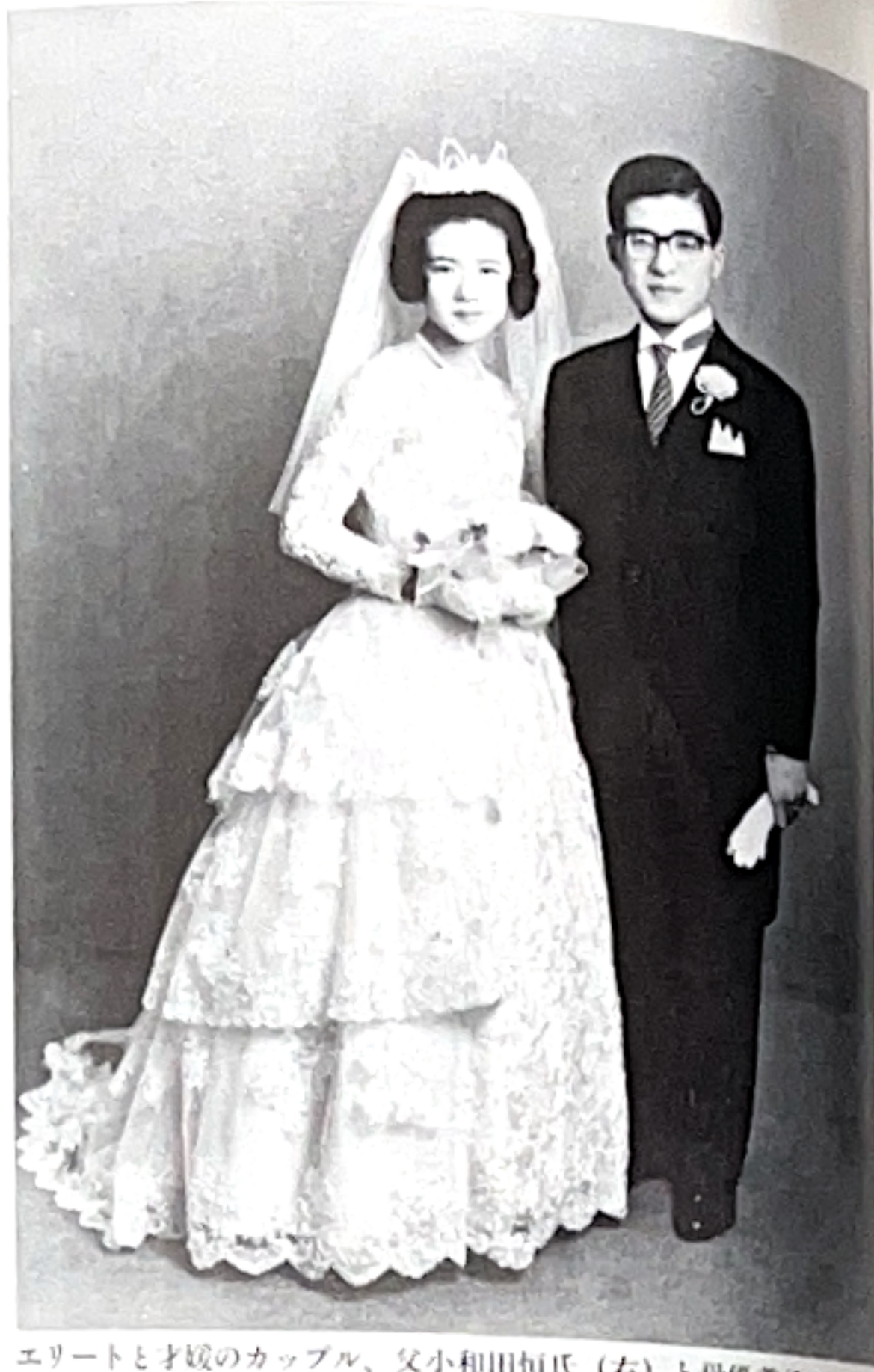
外務省でのニックネームは「スーパーコンピューター」。部下が頭を痛める難問にも、たちどころに解答を見付け出す仕事ぶりが由来だ。趣味は子供のころから故郷の新潟で鍛えたスキー。外務審議官時代、中国上海地方を旅行中に「蘇州夜曲」を聞いて「日中戦争の暗い過去を思わせる曲の代わりに新曲を」と関係方面に働きかけ、四年秋これに代わる「蘇州ものがたり」などの曲が生まれた。堅物「切れる」のイメージの裏に隠されたエピソードだ。

一方、母の優美子さん(51)はチツソ相談役江頭豊氏(85)、寿々子さん(76)夫妻の長女で一人っ子。慶応大仏文科を卒業、三十七年恒氏と結婚した。

雅子さんの妹は双子の二女礼子さん(26)と三女節子さん。二人は一家のモスクワ時代に、ジュネーブの病院で誕生。雅子さん同様、モスクワ、ニューヨーク、ボストンなど海外生活を経験している。礼子さんは慶応大法学部を卒業後、パリ第二大学、ジュネーブの大学院に進み、現在、国連難民高等弁務官事務所ハノイ事務所に勤務している。節子さんは東大文学部を卒業後、



母方の祖父江頭豊氏(左)と祖母寿々子さん。江頭氏はチツソ相談役



エリートと才媛のカップル、父小和田恒氏(右)と母優美子さん

おじもそろって東大卒

本田技研工業に勤めたが「もう一度文化人類学を勉強したい」と東大教養学部に進学、三年に在籍している。

恒氏は男五人、女三人の八人兄弟の二男。男子は全員東大に進んだ。

長男小和田顕氏(66)は文学部を卒業、現在は専修大学文学部で漢文学を教えている。

弟の三男鎌田隆氏(56)は法学部を卒業後、三井銀行(現さくら銀行)に入り、間もなく大阪府の鎌田家の養子となった。現在は弁護士。第二東京弁護士会に所属し、トヨタ自動車の顧問弁護士などをしている。

四男小和田統氏(51)は法学部を卒業後、運輸省入り。大臣官房審議官などを経て海上保安庁次長を最後に退職。

平成四年六月から国際観光振興会理事を務めている。

五男亮氏(48)は工学部卒で現在は運輸省港湾局計画課の港湾計画審査官。

長女節子さんは生後間もなく死亡。

二女恭子さん(62)は奈良女子高等師範卒業で播磨耐火煉瓦常務片田中氏(昭和六十二年死去)に嫁いだ。三女紀子さん(52)はお茶の水女子大卒業。日本興業銀行常務柏原一英氏(56)の夫人。

親類に江藤淳氏も

父方の祖父に当たる穀夫氏(91)は新

潟県村上市出身の教育者。先祖は約二百年前にさかのぼる村上藩の武士だ。戦後間もない二十一年から三十三年まで新潟県立高田高校の校長などを務めた。現在は、やはり教育者だった夫人の静さん(88)とともに、茨城県水戸市の老人保養施設で、リハビリをしながら生活している。

一方、母方の祖父豊氏は三十七年、日本興業銀行から新日本窒素(現チッソ)に派遣され、水俣病被害者らとの補償交渉などに当たり、社長、会長を歴任。四十八年春から相談役を務めている。夫人の寿々子さんは六十三年、俳句とエッセーをまとめた「秋燈」を出版した。自宅は雅子さんの自宅と同じ敷地にあり、休日には雅子さんが料理を作ることもあるという。

豊氏の父は江頭安太郎海軍中将、寿々子さんの父は山屋他人海軍大将で、一族には海軍関係者が多い。豊氏のすぐ上の兄古賀博氏(87)は、前身が海軍予備校だった東京の私立海城学園長。「海は蘇る」などの小説で有名な作家、文芸評論家の江藤淳氏(本名江頭淳夫)は、豊氏の長兄の子で、優美子さんのいとこに当たる。

このほか親類には歴史学者で東大名譽教授だった江口朴郎氏(平成元年死去)らがいる。

(共同通信社会部 丸山慶一)



雅子さんの双子の妹、二女礼子さん(左)と三女節子さん